〔通信欄〕

座談会「秋季大会の回顧と地区研究のあり方について」についてのコメント

堀　内　剛　二

「天気」17巻2号（1970）に上記座談会の記事が出ていて，その文責の所在が明らかでないが，講演企画委員会か，発言者か，ないしは天気編集委員会かの判断にいささか苦しむのであるが，とにかく面白く読ませてもらったもので，つい一言ものを申したい誘惑にかられた．本来「座談」というものは，しゃべっている人にとって気持のいい開放状態を意味するが，出来ればそれらが対話として「座談会」として有機的に構成凝集されることが望ましいのである．旧年のいつか，筆者は「シンポジアム」なるものについて一文を草したが，近「天気」が本年巻頭に「1970年代の気象学を語る」と題する「座談会」を掲載し，上記はその2号所載であるから，多少「座談会づいて」いるやに見受けていて，これは論文ばかりでも変化がないので，いわば読者の「リクエスト」を先取りして内容にバラエティーを持たせようと試みられているのでもあろうか，と推察し編集者の労を多としている次第である．

さて，不肖筆者は現在気象庁図書課に籍をおいて，気象庁刊行物（定期不定期を含む）全般の管理事務を所掌しているものであるが，まず手始めには，その限りにおいて申しのべるのが穏当として，標記座談会記事76頁左側下から11～12行目の“「研究時報」は投稿後印刷までに時間がかかるので，反響を見て研究を発展させることができにくい”というB氏の発言が目についた．筆者はB氏がこの言葉通りに話されたのかどうかは知らないし，また「天気」の上記二つの「座談会」記事がいずれも本文中発言者の名を記していないことに注意をひかれたが，この点についての天気編集委員会の微妙な配慮について筆者は特に深い興味を持ったものである．それはそれとして，「研究時報」の印刷が遅れている，いや「研究時報」に限らず，気象庁刊行物一般が印刷遅延の状態にあるという伝説は，かつてそれに類する事実があったが故に今なおそれを盲信されるのは止むを得ないとして，この二年間にそうした事実はかなり解消していることを御参考までに申し上げたい．

原稿投稿より印刷配布までには種々の手続きが介在するので一概にいえないし，こうした表現は適当でないが，まず上級に属する著者の場合はほぼ6か月程度で印刷されている筈である．早い話が，研究時報には表紙裏面に「投稿規定」というものがあるが，それを読んでおられる方があるのか知ら，と思われるような場合が正直のところ偶々あるというと読者を傷つけることになるであろうか．また筆者は単に座談の一行の揚足をとる積りは毛頭ないが，B氏の「反響を見て研究を発展させる」と言っておられるのを読んで奇異な感を覚えたものである．一体，現在の研究者は自分の論文の印刷後の反響を見て研究を発展させる程の時間的余裕があるのであろうか．一つの国際学会で読まれた論文が正式に印刷され，読者の手に渡るには約1か年半の時日を必要とするのである．そのため各研究者はプレプリントないしは私信を通じて情報交換を行なっているのが実状ではなかろうか．たしか「ラモーの甥」は将棋さしを見て「お前さんも小さな木片をおして時間をつぶすのかネ」といったが，相手の出方を待つというのは孫氏の兵法においても策の最上たるものではないであろう．

さて，本座談会記事は，いうまでもなく，上記の如き片々たる問題の外に極めて興味津々たる記述に満ち満ちていて，目下雑務多忙の筆者は到底それをつくすことができないし，伝説を破壊することは「時間」におまかせすることとして，官庁刊行物と学会刊行物との間には，契約事務上，予算上，会計年度上の大きい相違のあることを知らない方が少ないようである．弁解になるがこれは極めて大きいハンディキャップを意味することを指摘したい．重ねて申し上げるが，「完全原稿」を頂けるなら，原則的には寄稿者が納得される期間に印刷して差上げられることを申添えたい．

さて，いま一つ見受けた点は75頁右側上から3～9行目のJ氏とF氏の問答で，こうしたお話自体については，つまり電離層超高層の分野の人々との交流などにつ

—1970年4月20日受理—

いては「システムがほしい」とか「持ちたいと思う」とか単にそう言って頂くだけでは一歩も進まないということを改めて申し上げたい．筆者のいいたいことは，筆者は10年来そうしたことをやってきているが，現代気象学に極光の専門的知識が必要だと思ったかたがたが自分でその勉強をして貰うことが最も確実な方法なのである．もっともらしい話だけならば，誰でもしゃべれるが，それを実行することと単なる話との距離ははなはだ大きいので，発言者中には駒林，嘉納両氏の如き優秀な惑星大気高層物理の専門家が居られるので，この点を特にお願いしたいと思う．というのは，現在地球電磁学会に気象学会会員が何名出席しているであろうか，そうした簡単な実践なくしてその分野との交流は不可能であろう．

「地区研究」の問題は気象庁の技術向上のためにも極めて重要な問題であって，そのためには「気象研究所」のあり方を十分に検討する必要があるが，いまのところこれについては一応筆者の所管外として「にげ」ておくことにしよう．ただ，最後にもう一言いいたいことは，気象学会も年々会員増大をつづけて益々盛大に向いつつあるようで，結構なことには，春秋の大会発表論文は3会場3日間を費してなお十分とはいえないと聞いている．しかし乍ら，不思議なことに，それだけ多数の論文が読まれ，大冊の予講集が出されながら，活版印刷として正式に publish されるものが非常に少ないことであって，この問題についての明解な答を例えば上記座談会発言者の如き有識者に伺いたいと思っている．伝説といえば，英文原稿が和文原稿にまさるというひどく大時代的な意見も払拭されきっていないようであるが，米気象学会（AMS）の Bibliography が定常的にとっている気象学関係論文中日本人著者の最大多数は「研究時報」からであることを申し上げて拙文の筆をおくことにする．もっとも，数が多いということが優れているのと同義でないことは，いうまでもなく先刻読者も承知のことと，いわれぬまえにいっておこう．しかし AMS が文献に取上げることのなかには，ある程度ベリフィケーションが含まれていると解してよいと筆者は考えているのである．

(16 April, 1970)

第15期第7回理事会議事録

日　時　昭和45年5月26日（火）18.20～20.50

場　所　気象庁予報部会議室

出席者　山本理事長，大田，小平，大井，神山，岸保，北川，各常任理事，孫野，高橋，礒野，山元，中島，沢田，武田，須田，日下部，各理事
関口監事

列席者　伊藤（博）大会委員長

議題

議決事項：

1. 総会準備について
理事長あいさつ要綱案
昭和44年度事業経過報告要綱(案)
同　決算書
同　会計監査報告
昭和45年度予算書(案)
（原案どおり承認された）
同　事業計画要綱(案)
気象学長期計画について若干修正の上承認された。
次期当番支部について
北海道支部とし秋季を担当してもらう。

2. 松永賞候補者推薦について（北川理事提案）
光田寧（京大，防災研）を推薦する。
題目「超音波計測計の製作とこれを利用した下層大気の研究」

3. 第16期理事会への引継事項
(1)昭和46年度当番支部は札幌（秋季大会）とすること。
(2)賛助会員獲得を推進すること。
(3)賛助会員増加を勘案し支部交付金の増額等を考慮すること。
(4)外国文献集刊行を推進すること。
(5)正野重方記念論文集刊行を推進すること。
(6)学会々場費については本部と支部で打合わせて決定すること。
(7)学会奨励金は今年度より実施すること。
(8)気象学長期計画を立案すること。
(9)「70年代の科学研究，学術体制ならびに日本学術会議のあり方」について討論すること。
(10)予算決算のまとめ方について研究すること。

承認事項：通常会員川上政弘外9名の入会を承認。